



蠅取り瓶



蠅取り棒



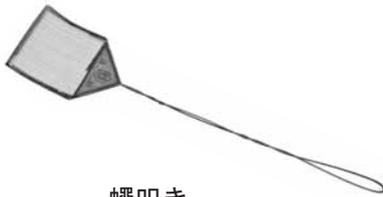
蠅取りリボン



鼠入らず



蠅取り器



蠅叩き



蠅帳 (左右2点)



寄贈資料の中から 蠅取りと蠅除け

今回は、資料の中から蠅に関係する道具を紹介します。蠅は五月頃から発生し、食べ物やゴミや排泄物などにたかり、病原菌を媒介するため嫌われています。人々の農耕や生活に牛馬が関わっていた頃や、下水道が普及するまでの間は、一般家庭でも蠅が多くいました。

蠅取り瓶は台所に置いて使います。中に少し水を入れ、瓶の下に蠅をおびき寄せる餌を用意します。下にもぐった蠅が飛び立つと瓶に閉じ込められ捕まるしくみです。

蠅取り棒は全長 140 cm のガラス製です。下の丸い部分に半分程水を入れ、天井にとまった蠅にそっとあてがうと蠅が下に落ちます。これらの道具は、蠅が水平には飛ぶが上下には飛べないという特性を利用したものです。

蠅取りリボンは、勝手口や便所など蠅がたくさんいる場所の天井から吊り下げておきます。リボンは粘着力があるため、蠅が一度とまると逃げるできません。

蠅取り器は時計の機械を利用した製品です。木の回転

部分に餌を塗り、ゼンマイを巻くと、木がゆっくりと回転を始めます。蠅がここにとまると隣の網付きの箱の中に閉じ込められるしくみです。

蠅叩きは家具などにとまった蠅を叩いて仕留めるもので、叩く際に風が起きにくいよう金網でできています。

蠅帳は家具型と傘型の2種類あり、家具型は網を張った小型の戸棚です。風通しがよいので、蠅を避けるだけでなく、食べ物が傷むのを防ぐ役割もあります。

傘型は食卓の食べ物に蠅がたからないようにするものです。食事の支度が済むまでの間や、食事に遅れる人の分に使用します。写真の資料は木枠に網を張ったものです。現在では布張りで開閉式のものが使われています。

鼠入らずは台所で食器や食べ物などをしまっておく戸棚で、名前の通り鼠除けのために生まれたものです。上段の戸棚が網戸になっていて、ちょうど蠅帳と同じ機能を持ちます。

後藤正光さんの漁話

船上の生活・サバ一本釣船の話

〈小僧の飯炊き〉

昭和27年、19歳のころにサバ船へ乗った。その当時の我入道で、50t未満で30人乗りくらいの大きさの船だった。初めは「小僧」と呼ばれた一番下っ端の炊事係で、3度の飯炊きとコマシ(釣りの餌)運びが仕事だった。手が空くとサバ釣りをやらせてもらえた。

海が凪で、平らに走っているときはいいが、波が高いと船が揺れた。すると釜の中の水も一緒になって揺れて、ご飯を炊くにも水加減の見当が付かなかった。だから固かったり柔らかかったりした。若い衆に柔らかいご飯を出すと、「こんなくちやくちやのを食えるか!」と叱られた。

乗ったばかりの時は、麦飯(大麦を混ぜたご飯)にイモや大根を入れて炊いたが、それでも嬉しかった。ボーケ(棒受網)でサンマをたくさん捕ったことがあって、「お祝いだから白い飯を炊け。」と言われたが、それまで大根だの大麦だのを混ぜて炊いていたので、水加減がわからなかった。ご飯がボロボロに焦げてしまったので、鍋を突っついて、船の後ろから海へドーンとうっちゃり、それでまた一生懸命炊き直して、「まだやってんのか。いつになったら炊けるんだ。」と怒られたりした。捨てたのを見つかるので、尊い米だから叱られるので、小僧の仲間で内緒にした。そんなことが時々あったよ。

船の上では、おかずは捕れた魚が多くて、ご飯と味噌汁、野菜は傷まない根菜類、じゃがいもとか、かぼちゃなどを食べた。あの当時は、どこの家もかぼちゃを作っていて、それを船に積んで沖へ行った。だから船の上では、野菜はいつもかぼちゃばかりだった。漁から戻って次の漁の支度をするのに、もうなかりろうと思っ行ってくと、「オラの家にな、かぼちゃがあるからとり行ってこい。」と先輩に言われた。それで仕方なく出かけて行って、かぼちゃをごっそり積んだが、飽き飽きだった。いやになるほど毎日食べた。サバを食うのもいやだし、かぼちゃを食うのもいやだった。

サバ船には、ブリッジ(船橋)の後ろに、重油で使うカマドが2口ついた台所があった。外に野菜を入れる箱があり、その後ろに屋根のない、囲いのついた便所があった。便所に座って前を見上げると、箱にかぼちゃが積んであって、操舵室で舵取りが向こうを見ている時に、かぼちゃをとって便所にポコッと落とす。直に海に落ちて、後ろを見ると遠くでポッカーンと浮いてきて、「ああ浮いた浮いた。」なんて言う。2~3人いる仲間の小僧たちで、様子を見ていて「早くやれ早

くやれ。」「ドボーン。」「もういっこともういっこ。」「あんまりやるとやばいよ。」なんて、楽しかったね。

でもね、辛かったよ。例えば勝浦沖で漁をして、勝浦港へ朝帰る。水揚げして船を片付けて、そうするとわれわれ小僧は、この間に飯炊きをして、乗組員に食べさせた。食べ終わると茶碗を洗って、次のご飯の支度をしてから寝るので、2時間くらいみんなより遅くなった。起きる時も、2時間早く起こされた。そうすると10時ごろ寝て、14時ごろにもう叩き起こされちゃう。16時にはご飯を食わして、海に出なきゃいけない。それが辛かった。毎日4時間睡眠で、2週間くらい行って来た。釣りながら居眠りばっかりして、「あの小僧また寝てる。」と怒られて、竿でピシャーンなんて叩かれた。

〈ラクノマで寝る〉

おれがサバ船に乗った時なんてね、ひどいもんだよ。「ラクノマ」と呼んだ船員室でも、小僧が一番後ろの舵箱かじばこの横へ、3人ずつ6人が手足を縮めて横になった。天井が低くて、横になると荷物の棚が腹のすぐ上まであり、壁際では膝を立てられないほどだった。水押(船の先端)に足を向けて寝るが、床が傾いているので、波がドカーンと来ると、3人でズ、ズ、ズッと下がってしまい、また一生懸命上へあがった。

そこから機関場の後ろまでは、座敷のようになっていて年寄りが入った。おじいさんたちは余裕で寝た。ブリッジのラクノマへは中年の人が6人くらい横に寝て、あとの若い衆はミヨシ(船の先端にある船員室)へ寝た。ミヨシには両側と前へ3段ベッドがあり、1段に2人ずつ寝た。機関長は機関場の横っちょにベッドがあった。多い時には45人くらいだった。

舵箱の横に3年寝て、次にミヨシで寝た。年数がたつてえらくなると、寝る場所が変わった。けれども年数よりも年齢重視で、戦争から復員して乗りだした中年の30代の人には、ずいぶん叱られた。布団は3尺の半分の幅の布団を、家から持って行った。

〈船番のこと〉

われわれ小僧は、我入道の河岸へ着いても、家へなんか帰らなかった。船には氷や餌や米の仕込みをし、すぐに出かけられるようにしてあったから、「船番」といって年中留守番をした。船番は小僧や小若い衆だけなので、他に誰もいないから自分たちの好きなどころに寝たし、肉を買ってきて、夜食を作って食べたりした。家にはちょこっと行って来るけど、夜は狩野川を泳いで向こう岸へ渡り、遊びに行っ、夜中に船に帰って寝た。船番がいちばん楽しかったよ。

盆とか正月とか、海へ出ないのがわかっている時には家へ帰った。

(話：後藤正光氏 沼津市我入道在住)

資料館の調査ノートから⑩

マグロ建切網漁のジオラマ作り

当館1階の展示室では、国の重要有形民俗文化財に指定された漁撈用具を展示していますが、それらの実物資料と同様に注目を集めているのが、内浦長浜で行われていたマグロ建切網漁と魚見小屋の様子を再現したジオラマ(模型)です。

これらのジオラマは、平成16年の夏、武蔵野美術大学の神野善治教授の指導・監修のもと、武蔵野美術大学学生グループ及びOBの総勢14名の方々により、3日間という短期間で製作されました。併せて、再現された魚見小屋の揚げ戸から見える内浦湾の風景画も、現地調査に基づき、油絵を専攻する学生が描きました。

ジオラマの製作には、どこにでもありそうな材料を使い、製作方法にもちょっとした工夫がされています。今回はそのタネ明かしをしましょう。

マグロ建切網漁のジオラマ

①山と木々 山となる土台は、2つの大きな発泡スチロールを重ねて貼り合わせたもので、それにノコギリの刃を入れ、谷間を切り取り、金ブラシでこすってなだらかにしました。発泡スチロールは、水をはじいて水彩絵の具が載りにくい素材のため、表面の色づけにはスプレーペンキも使い、何度も塗り重ねています。

山に生える木々は、拾ってきた小枝を使いました。こんもりと繁った葉は、実は、食器洗い用のスポンジでできています。ビニール袋の中で緑色の水彩絵の具

を水に溶かし、その中に細かくちぎったスポンジを入れ、よく浸み込ませて乾かしたものを、小枝に挿して立木らしくしました。

②海岸線 黒・グレー・白・水色等の様々な色を使い、海岸の砂浜の色を出すようにしました。

③海と水面 海底は、海の青さと深さを表すため、濃い青や緑で色づけし、一面に薄いアクリル板をおきました。水が透過し海面が光って見えています。

④魚見の櫓 写真や図を参考にしながら、バルサ材(模型作りに使われる軽くて加工しやすい木材)や竹ヒゴで作り、古色づけをして落ち着いたさせました。

⑤網小屋と居小屋 屋根もその下も発泡スチロール製です。側面には、バルサ材の壁や戸板をボンドで貼り、屋根には、茅葺きの感じを出すため、カッターや竹楊枝でひっかいて細い線をつけました。

竹簧巻き(簧に編んだ竹で棟を巻いて始末する方法)の屋根棟には、おでんの竹串を使っています。

⑥屋根付船揚場 骨組みはバルサ材です。屋根の平は、薄い板の上に紙粘土を伸ばし、軟らかいうちに押判で凹凸をつけ、瓦屋根に見えるようにしました。

⑦船 船の側面は2枚のバルサ材を合わせましたが、材が曲がらないので、いくら接着してもすぐに反り返り、作った学生は苦労しました。

⑧マグロ 本体は紙粘土で作り、背びれや尾びれは、ペットボトルのプラスチックのラベルをひれの形に切って挿しました。色づけの後、ニス塗って水の中で光る感じを出しました。



内浦長浜のマグロ建切網漁ジオラマ

⑨人物 人物には、固まると硬化する紙粘土を使い、大きさも細かく検討しました。

魚見小屋のジオラマ

魚見小屋の様子を詳しく表したジオラマです。マグロ建切網漁のジオラマと同じ製作方法ですが、色合いも雰囲気も少し違います。

⑩山と木々 太い木は、拾った枝を芯にして周りや根の太い部分に紙粘土を足して幹の形を作りました。背後の山には、紙粘土で作られた山の神の祠があります。

⑪魚見小屋の屋根 チョコレートの包装箱の中に入っている凹凸のある茶色い緩衝シートに、絵の具でトタンらしい色づけをしています。

⑫魚見小屋の揚げ戸 ダンボール片で戸板を作り、軒下から戸を揚げてつかえ棒をしています。この小屋の中から見える景色が下の風景画です。

⑬魚見小屋の畳 発泡スチロールを床にしていますが、ささくれた畳の感じが出るように筆で細かく色づけをし、畳の縁も絵の具で描いています。

⑭ローフー(竹製の巨大なメガホン) 竹筒の部分には、強度のある枯れた一年草を使っています。表皮を削り取り、先端は細かく裂いた竹をラッパ状に広げ、周りに紙を貼っています。

⑮トンボガサ(菅笠) 厚紙で円錐形を作り、その上から、バルサ材や紙を放射線状に貼りつけ、笠の骨にしています。

⑯ムシロ 薄茶色の紙やすりをよく揉み、軟らかい風合いにしたものをムシロに使っています。

⑰石垣 土台の発泡スチロールに紙粘土を貼ったり、カッターで削ったりして石の感じを出しています。



内浦長浜オオミネの魚見小屋ジオラマ



魚見小屋(再現)の揚げ戸から見える内浦湾風景画

資料館からのお知らせ

平成23年度事業の概要

本年度は、国重要有形民俗文化財に指定された「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」を広く知っていただくことを目指して企画展(仮称)「船上での生活と道具」の開催を11月に予定しています。

また、この展示に併せて、関連する講座や体験学習も計画しています。

なお、この漁撈用具の国指定を受けて、指定を受けた資料の台帳や目録の役目を持つ、報告書の作成作業を進めてまいります。

人事異動について

平成23年3月末日付けで館長関野昌宏及び事務補助員平田智美が退職し、4月2日付けで新館長鈴木裕篤、事務補助員高木美奈が着任いたしました。

沼津市歴史民俗資料館だより

2011.6.25 発行 Vol.36 No.1 (通巻190号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷 2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/rekimin/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.shizuoka.jp